

終わりのない散歩 (石田衣良)



石田 光



笹原 愛



中島 大輔



宮川 沙和



邊見 唯

一 作者と作品について

石田衣良（一九六〇〜）は東京都江戸川区に生まれた。一九九七年に『池袋ウエストゲートパーク』で第三六回オール読物推理小説新人賞を受賞した。その後、二〇〇三年に『4 T E N フォーティーン』で第一二九回直木賞、二〇〇六年に『眠れぬ真珠』で第一三回島清恋愛文学賞を受賞した。

本名は石平庄一（いしだいらしょういち）で、ペンネームは名字の「石平（いしだいら）」に由来する。

「終わりのない散歩」は二〇〇五年に出版された『てのひらの迷路』に収められている。『てのひらの迷路』には二十四編の話が収められており、エッセイ風のものから、私小説、ファンタジー、ホラー、恋愛など様々なジャンルの話がある。

作品自体は短く、読みやすい。また、会話文が多く、「ぼく」とおばあちゃんとのやり取りが多く描かれている。後半部分で、おばあちゃんが自分の家や郵便局の場所が分からなくなってしまいが、そのときの「ぼく」の気持ち、もらった草餅を食べながら「ぼく」が何を考えていたのか、などということを生徒に考えさせることが授業のポイントとなってくるだろう。

二 叙述について

そのおばあちゃんとは、家の近くを歩いているとき、よく顔を合わせるがあった。

「その」という言葉があることから、おばあちゃんが特定の人物であることが分かる。また、後に続くおばあちゃんについての説明がすんなり頭に入る。

振り返ると、腕を直角に曲げて元気よく振りながら笑いかけてくる。

「元気よく」とあり、おばあちゃんが元気でしたっけ人物であることが分かる。

梅雨入り前のからりと乾いた空は、夏のように硬い青さだった。

この物語では、天気とおばあちゃんの心情とが類似している。後の「厚い雲が切れたような表情は、その日の気まぐれな天気と同じだった。」という記述からも、おばあちゃんの心情が天候の描写と類似していると考えられる。

この一文では、「夏のような硬い青さ」から、おばあちゃんの気持ちや夏の青空のように晴れ晴れとしており、不安もなく強い状態であること（＝硬い）が分かる。

「使わないと膝がもつと悪くなるって脅されてね。」

「もつ」という表現より、元々膝の具合があまり良くなかった。

「最近は何の日でも歩かないとなんだか調子が出なくて。」

「最近は何の日でも歩かないとなんだか調子が出なくて。」

一日中机に向かっていてるだけのぼくも、運動不足は同じだった。

「だけ」とあり、ぼくの職業は、一日中机に向かって作業を行い、ぼぼ動かない仕事であると考えられる。

彼女はちらりとこちらを見上げた。

「こちらを見上げた」ことが分かるので、ぼくとおばあちゃんの視線がぶつかっている。または、ぼくはおばあちゃんの動作に気付いた程度には、そちらに気を向けていたと考えられる。おばあちゃんが見上げていることから、彼女がぼくよりも小柄な人物だと分かる。

「でも、あなたなら小さなダンベルでも持って歩くといいかもしれない。」

ぼくはおばあちゃんから「付加をかけたウォーキングが出来るだけの体力がある」人物だと分析されている。また、ぼくが聞いていないことまで話していることから、おばあちゃんは話好きであり、ぼくと話すことを楽しんでいると想像できる。このことは、これ以前のおばあちゃんのセリフからも読み取れる。

「えっさ、ほいさつて。」

おばあちゃんの朗らかで茶目つ気のある性格がうかがえる。(言葉にあわせて腕を動かす動作もしていたかもしれない。)

「残念だけどこまでね。」

「残念」という表現より、おばあちゃんはぼくとお喋りをしながら歩くことができ楽しかったと感じている。

「じゃあ、またね。」

「また」という言葉から、おばあちゃんは再びぼくと話す機会がある、または会った時には話しかけようと思っている。

「今日は突然失礼いたしました。」

あの年代の人らしく、最後は急に丁寧になった。

それまでは、砕けた話し言葉であったが、この一言だけは年下であるはずのぼくに対しても丁寧な言葉を遣っている。「あの年代」||「おばあちゃんの年代(七十代後半)」。

直角に曲げていた腕を上げると、信号待ちをするように元氣よく手を振って幅の広い歩道を歩いていってしまう。

立ち止まったときでもおばあちゃんの腕は直角のままに保たれていたとわかる。また、おばあちゃんの元氣のよさが別れ際まで強調されている。さらに「歩いていってしまう」ので、ぼくの反応を待つことはしていない。

ぼくがこちらこそと言うと、肩越しに上がった手がふわふわと漂うように揺れた。

ぼくはおばあちゃんの後ろ姿に声をかけている。手は「肩越しに」上がっているので、おばあちゃんは振り向かずに手を振ったことがわかる。「ふわふわと漂うように」とあり、また「振った」ではなく「揺れた」という言葉を用いていることから、先ほどの元気のよい印象とは違い、柔らかい印象を受ける。

ぼくは自宅で仕事をしているので、昼間から近所を歩くことが多いのだ。

「自宅で仕事をしている」とあるので、先の文と関連させて考えると、ぼくの職業は、一日中自宅の机に向かって作業を行い、ほぼ動かない。また、時間の拘束がなく自由に外出でき、その頻度も高い仕事である。

天気の良い日には、彼女はひさしの大きな麦藁帽をかぶり、選挙応援の人たちがするような白手袋をしていた。雨の日は暑くてたまらないと言いながら、防水加工のトレーニングスーツを着ている。

ぼくとおばあちゃんが初めて言葉を交わした後も何度か（最低でも二回以上）会っていることがわかる。また、おばあちゃんはきちんと気候に合わせた格好をしている。白手袋は日焼けを防ぐためか。

彼女と一緒にいるとぼくまで腕を曲げ、しっかりと脇を締めて、早歩きをするようになってしまった。

初めておばあちゃんと会ったころは歩く速さだけであったが、何度

も会ううちに、歩く姿勢までおばあちゃんにつられるようになってしまった。「しまった」とあるので、ぼくはそうするつもりはなかったのだが自然とそうなったと考えている。

たとえ見慣れた路地でも、背筋を伸ばし、そんなふうに風を切って歩くのは、なかなか新鮮で楽しいものだった。

見慣れてしまったいつもの道でも、歩き方を変えるだけで、新しい道を歩いているような新鮮さを感じることができる。「なかなか」とあるので、思っていた以上に新鮮で楽しかった。

あれは初めて言葉を交わしてから、三か月ほどたった日のことである。

初めておばあちゃんと会ったのが、梅雨入り前という記述があるので、三か月後はおよそ八月の終わりごろ。

なんだか朝からおかしな天気で、厚い曇り空からぱらぱらと大粒の雨がこぼれたかと思うと、雲が切れて急に真夏のような日ざしが注いだりする。

これから語られるエピソードが、今までのおばあちゃんとのエピソードとは異なるものであるということの暗示。

ぬれた路面がざらりと黒く光るのだ。

「ざらり」ではなく、「ざらり」という表現になっている点から、光り方がより鋭いように感じられる。

ぼくが彼女と出会ったのは、いつもの町内から少し離れた隣の町のことだ

った。

これまでおばあちゃんは、自分の町内だけをウォーキングのコースにしていると聞いていた。しかし、今回出会ったのは、そのウォーキングコースには入っていない隣町であった。これまでのエピソードとは明らかにおばあちゃんの様子が違うことがわかる。

買い物をすませて家に帰ろうとすると、一方通行の向こうから雨の日用のかっこうをして歩いてくる。

この一方通行は、車の一方通行か。「歩いてくる」とあるので、おばあちゃんらしき人がだんだん近づいてくる様子がわかる。

鮮やかなレモンイエローのポリエステルの上下。

「上下」という体言止めが使われており、おばあちゃんの着ている服そのものが強調されている。ここでは、目立つ色の雨具を着ていたのでおばあちゃん存在に気づいたのではないかと考えられる。

なぜかいつもより早足で、ウォーキングというより小走りでもしているみたいな感じだった。

やはりおばあちゃんの様子が、これまで語られてきたものとは違うことがわかる。「小走り」とあるので、心理的に少し焦っている様子が読み取れる。

彼女はぼくを見つけると、さっそく声をかけてきた。

「さっそく」という言葉から、おばあちゃんが知っている人（「ぼく」）を見つけて、間髪を入れず話しかけてきたことがわかる。

「あら、よかった。おうちに帰るところなの。」

知っている人を見つけることができよかったという安心感から出たセリフ。次のぼくの言葉を読むと、このセリフが質問の文であることがわかる。

ぼくはうなずいて言った。

「うなずいて」という言葉から、おばあちゃんの質問にまずうなずいて、一呼吸置いてから次の言葉を発していることがわかる。おばあちゃんの普段と異なる様子を受けて、次のセリフに続けている。

「ええ、ちよつと資料を探しにいつて、戻ってまた仕事です。」

具体的に買った物を言わずに「資料」と濁していることから、小説を書くのに必要な材料を買いに行ったのではないかと考えられる。

「そうなの。なんだかわからないけど、自由業というのも大変よねえ。」

「自由業」とは、一定の雇用関係や勤務時間などに縛られておらず、独立して営む職業者のこと。小説家の他にも、画家や医者、弁護士、芸能人などが自由業にあたる。

「なんだかわからないけど」という言葉から、「自由業」というものがどういうものかということ、このおばあちゃんはよく分かっているのだと考えられる。

彼女はぼくが小説を書いているということが知らない。

おばあちゃんには、自分の仕事は何であるかを明かしていないこと

がわかる。

とても近所の人にそんなことは言えなかった。

「とても」とあり、近所の人との関係を気にしていると考えられる。言えない理由としては、世間体を気にしているのではないかという点や、自分のことが小説のネタにされているのではないかと思われ、近所の人から疎まれるのを恐れているのではないかという点などが挙げられる。「そんなこと」とあるので、小説家という職業を、ぼくは決して価値のある仕事だと考えていない。

今でも職業欄に自由業と書くくらいなのだ。

小説家と書けるほど、自分の小説家としての技量にまだ自信を持っていないということが考えられる。

ぼくには、自由業の意味は、いまだによくわからないのだけれど。

「いまだに」という言葉があることから、職業欄に「自由業」と書き続けてきて長くなるが、その間ずっと、「自由業」とは本質的にどういふものなのかわからずに書き続けてきたということが読み取れる。

不安そうな上目づかいで、こちらを見ると言う。

「不安そうな」とあるので、おばあさんの身に何かが起こったのではないかと考えられる。また、以前の「ちらりとこちらを見上げた。」のときと比べてより長い時間こちらのことを見ていたのではないかと考えられる。そして、「言った」という過去の表現ではなく、「言う」と、現在形の表現になっている。

「じゃあ、また少し一緒に歩いてもいいかしら。旅は道連れというけれど。やっぱり一人だけで歩くものじゃないわねえ。」

「旅は道連れ」とは、旅をするには誰か行動を共にする人のいる方が心強いということ。

「やっぱり」とあるので、一人で歩いていて後悔をするような出来事が、おばあちゃんの身に起こったために出たセリフであると考えられる。しかしここでは、おばあちゃんに具体的に何があったのかまでは話されていない。

なぜか深くため息をついた。

ここでも、これまでの話のおばあちゃんとは様子が違うことがわかる。前のセリフを受けて、一人で歩いたことを後悔するような出来事が、おばあちゃんの身に起こったのではないかと考えられる。「なぜか」とあるので、ぼくにはため息の理由が分からない。

私はこの辺りで生まれ育って、もう七十年以上になる。

おばあちゃんが七十歳以上であることが分かる。

おかしなもので、焼けちゃったところのほうが発展して、焼け残ったほうが、昔のままごみごみした感じになっちゃうものね。

焼けてしまったところには新しい建物がどんどん出来て栄えているが、焼け残ったところは昔の姿のままである。「おかしなもので」とあるので、おばあちゃんがこのような状況に軽い皮肉の気持ちを込めているのではないか。

ぼくは空を走る雲を眺めながら、適当なあいづちをうっていた。

雲が走るように流れていることが分かる。「適当なあいづち」ということから、あまり真剣に話を聞いていない。

あまりこの辺りの地誌には興味がないのだ。

「ぼく」は自分の住んでいる地域に興味や関心が無い。「あまり」とあるので、全く興味がないわけではないが、いつでもその話題に飛びつくほど興味があるわけでもない。

そうやって話している間も、彼女の視線は定まらないのだった。

近隣の地誌について「ぼく」に色々と話しているが、郵便局の場所を思い出せないため、周りを見渡しながら歩いている。

電柱や看板、生け垣や表札を、探しのものでもするように行ったり来たりしていた。

「行ったり来たり」とあるので、目線があちこちに移っており、おばあちゃんの落ち着かない様子がかがえる。

なにか気がかりでもあるのだろうか。

おばあちゃんの様子に、「ぼく」は何かあるのかと疑問に思う。現時点ではおばあちゃんが自宅の場所を忘れてしまっているということには気付いていない。

だが、ぼくは人の心配ごとをすぐに口にあげられるほど神経の太い人間

ではなかった。

「神経が太い」は、凶太い、気後れしないという意味。

「ぼく」はどちらかという繊細で撃たれ弱いような性格で、それを自覚していることが分かる。

四、五分ほどすると、ぼくたちは町内に戻ってきた。

五分弱で戻ってこられるほどの近いところで二人が出会ったことが分かる。

彼女は慌てて言った。

おばあちゃんは「ぼく」が住むマンションは覚えていた。もう「ぼく」と別れなければならぬと思いつき、郵便局の場所を教えてもらおうとしている様子がかがえる。

目をそらしているが、彼女の声は真剣だった。

郵便局はおばあちゃんの家のおすぐ裏にある。真剣な声だったので、冗談で言ったのではない。「目をそらしている」ということから、おばあちゃんは何気なく聞くふりをしたのではないだろうか。

彼女の家はそのすぐ裏だったはずだ。

おばあちゃんの家は郵便局の近くであることが分かる。「はずだ」とあるので、「ぼく」は正確には場所が分かっているはずだ。または、なぜおばあちゃん自分の家が分からないのだろうか、という驚きの気持ちが読み取れる。

「どうも年をとると、もの忘れがひどくてね。ちょっと郵便局に用事があつただけで、道に迷っちゃったの。」

彼女は郵便局に用事があることにして、自宅の位置を探ろうとしている。

ぼくは胸をつかれた。

「胸をつかれる」とは、はつとすること。

このときぼくは、自分の家がどこにあるのか分からなくなっている彼女の状況に気づいた。

そしてあちこち探し回っているうちに、いつもの散歩コースをはずれて、隣町に行ってしまったのだ。

以前、町内だけをコースにしていると聞いていたにも関わらず、この日の彼女とぼくは、いつもの町内から少し離れた隣町で出会っている。このことから、彼女の意思で隣町まで足をのばしたというよりも、道に迷ってしまい隣町まで行ってしまったと考えられる。

ぼくは彼女のほうを見ずにさりげなく言った。

「さりげなく」とあるので、人の心配ごとをすぐに口にあげられるほど神経の太い人間ではないぼくは、核心に触れることを避けているのではないか。彼女を見ずに、さりげない様子で話すことで、ぼくが彼女の本当の状況に気づいていないようにふるまった。

「今日はたくさんウォーキングしたんですね。」

ぼくは彼女に対して、迷った末に隣町に行ってしまったのではなく、

彼女の意味で隣町までウォーキングをしたというようなニュアンスで話す。

彼女の笑顔は必死だった。

彼女は、自分の家がわからないような状況であるため必死になっている。また、彼に気づかれまいと笑顔を作って不安感を隠すためにも必死になっている。

「そうね。もう二時間も歩いたから、くたくた。」

実際に二時間歩いたため、体力的にくたくたになっている。また、家が分からないという不安により、精神的にもくたくたになっている。

「そうですか。じゃあ、近くだから郵便局まで一緒に歩きます。」

さりげない彼の気遣いである。彼女が家に帰れない状況を理解した上で、郵便局までの案内を提案する。

彼女の顔がぱつと明るくなった。

「ぱつと」とあるので、今までの不安感が急速に消えていった。

厚い雲が切れたような表情は、その日の気まぐれな天気と同じだった。

厚い雲は、彼女の不安感と類似している

ぼくたちは少し速度を落として、郵便局に向かった。

くたくたである彼女に対するぼくの気遣いか。精神的にも体力的にも疲れているであろう彼女を気遣ったのではないか。

彼女は女学生時代の話を始めた。

ここから彼女の女学生時代の話が始まる。先ほどまでの続きか。彼女の若いころの話は現在の彼女の年齢を感じさせる。

「今日はどうもありがとう。」

一緒に歩いてくれたことに対する感謝であり、自宅が分からなくなっていた状況を救ってくれたことに対する感謝でもあると考えられる。

「若い人の口に合うかどうか分からないけれど。また、一緒に歩きましょうね。」

彼女は、若い人は草餅をあまり食べないものだと考えている。

「また、一緒に歩きましょうね」の解釈としては、左記の四つが考えられる。

- ・ 今回の散歩で家が分からなくなったが懲りていない。
- ・ 彼とともに歩くことよって迷わないようにするつもりである。
- ・ 社交辞令である。
- ・ 本当に彼とまた歩きたいと思っている。

彼女は郵便局には寄らずに、路地に消えてしまった。

彼女の目的は郵便局に行くことではなく、帰宅することである。

ぼくは黄色いウインドブレーカーの背中を見送ってから家に帰った。

「見送ってから」とあるので、彼女がぼくと別れた後も迷わずに帰ることができているか、確認している。

途中で食べた草餅は、彼女の体温でまだ温かった。

先ほどまで彼女の上着のポケットに入っていたため、温かった。二時間のウォーキングの影響もあり、温かくなっていたのか。

三 考察

(一) おばあちゃんの人物像

この話の登場人物の一人であるおばあちゃんの人物像について考えていきたい。物語前半までのおばあちゃんは、

淡いピンクのジャージを着て、同じ色のウォーキングシューズを履いている。

おまけに髪も薄い紫というか、青みがあったピンクに染めているのだ。

という外見に関する描写や、

腕を直角に曲げて元気よく振りながら笑いかけてくる。

信号待ちをするぼくに元気よく手を振って幅の広い歩道を歩いていてしまう。

という動きに関する描写から、明るくて元気なおばあちゃんとイメージすることができる。

話が進み、物語の後半にあたる三か月後、登場人物であるおばあち

やんは、もの忘れが進み、道に迷ってしまう。ここで、読者である我々は、この「もの忘れ」について二通りの予測を立てることができる。一つは、このおばあちゃんは認知症になっており、その症状としての「もの忘れ」ではないかということ。もう一つは、認知症ではなく、誰にも起こり得る「もの忘れ」ではないかということである。物語の中で、直接的に「認知症が進行して」という表現はされていないので、年をとったことから生じる「もの忘れ」であろうと推測するのは、ごく自然なことであろう。しかし、隣町から家に帰っている途中で、おばあちゃんは昔の町の様子を長々と話している。これを、「昔の話ほどよく覚えている」という認知症の症状の一つだと考えられると、やはりこのおばあちゃんは認知症であったのではないかと考えられる。

しかし、このおばあちゃんは、自分が認知症になってしまったという事実を素直に認められないでいる。それは、おばあちゃんの次のようなセリフによく表れている。

「あら、あそこがあなたのおうちよねえ。ところで、郵便局はどこだったかしら。」

「どうも年をとると、もの忘れがひどくてね。ちょっと郵便局に用事があったんだけど、道に迷っちゃったの。」

ここで、おばあちゃんは郵便局に本当に用事があったので場所を聞いたわけではない。その証拠に、最後の場面でおばあちゃんは、郵便局へは寄らずに、路地の中に消えてしまっている。では、なぜおばあちゃんは郵便局の場所を聞いたのだろうか。おばあちゃんの家が郵便

局の裏であったことを考えると、郵便局が自分の家へ帰るための目印であったからではないかと推測できる。この場面、おばあちゃんの心の中での本当のセリフは、次のようなものではないかと考えられる。

「どうも年をとると、もの忘れがひどくてね。ウォーキングの途中で、家の場所を忘れてしまって。郵便局の裏というのは覚えていたからその郵便局を探していたら、道に迷っちゃったの。」

しかし、自分が自宅の場所まで忘れてしまうほどに認知症が進行しているということ認めたくないという思い、また、他人にもそのように思われたくないという思いから前述しているようなセリフになってしまったのではないかと考えられる。

(二) ぼくと彼女の関係の変化

ぼくが彼女と言葉を交わす前

・ぼくと彼女（おばあちゃん）は家の近くを歩くときに顔を合わせる程度の関係。

最初に言葉を交わした日

・きっかけはコンビニエンスストアに行く途中にいきなり後ろから、声をかけられたこと。

↓「よくお会いしますね。」

○彼女が彼に声をかけたのはどうしてか。

顔を合わせるうちに顔見知りの関係になり、声をかけた。このときの彼女の元気な様子から、積極的な性格がうかがえる。顔見知り程度の人間に声をかけたのは、彼女の社交的な性格や七十代後半という年齢のためか。

↓「じゃあ、しばらくご一緒してもいいかしら。いつも一人だから、話し相手がいるとうれしいの。」

この彼女の言葉により、二人で大通りの交差点まで歩く。

○会話の内容

・彼女が歩く目的について話す。いつもウォーキングをしている彼女との初めての会話は、そのウォーキングの目的についてである。

最初に言葉を交わしてから三ヶ月間

・顔を合わせるたびに二言三言の挨拶を交わすようになる。

○ぼくが彼女から受けた影響

・彼女と出会うと、ぼくも彼女のようなウォーキングをするようになる。

(腕を曲げ、しっかりと脇を締めて、早歩きをする)

↓ぼくは、見慣れた路地でも、背筋を伸ばし、そのように風を切って歩くのは、新鮮で楽しいものだと思うようになる。

・顔見知り程度の関係から、出会うと挨拶を交わす程度の関係になった。また、ぼくは彼女の日々の様子を知りようになる。

(天気の良い日、雨の日の格好や様子など。)

↓彼女と知り合ったことにより、歩き方が変化する。その結果、街の

見方や心のもちようにも変化があらわれる。

最初に言葉を交わしてから三ヶ月ほどたったある日

・いつもの町内から少し離れた隣町で出会い、ぼくを見つけると、さっそく声をかけてきた。

○会話の内容

ぼくの自由業についてや昔と今の町の様子、東京大空襲など話題はころころと変化する。話題というよりもむしろ、彼女が一方的に話しているような印象を受ける。「ぼくは空を走る雲を眺めながら、適当なあいづちをうっていた。あまりこの辺りの地誌には興味がないのだ。」「彼女の話を失礼にならないように聞き流しながら、一緒に歩くだけである。」などとあるように、ぼくは彼女との会話に積極的ではなく、聞き役にまわっている。しかし、彼女の話聞きながら、ぼくは彼女の異変に気づき始める。話している間も定まらない視線から、何か気がかりでもあるのではないかと思いついたのだ。ぼくは、彼女が郵便局の場所を尋ねたことにより、彼女が自宅に帰れない状況であるのだと悟る。

○『終わりのない散歩』を書いたきっかけ

この作品における「ぼく」はおそらく著者である石田衣良だろう。「終りのない散歩」を書くうと考えたのは、やはり最初に言葉を交わしてから三ヶ月ほどたったある日の彼女とのやりとりがきっかけではないかと考えられる。そのときまで、ぼくにあって彼女は「出会えば挨拶を交わす程度の近所の元気なおばあちゃん」であった。彼女が置か

れている状況に気づくまで、彼女の話を聞き流しながら、ただ共に歩くだけであった。

しかし、彼女が自分の家に帰れなくなったという事実気づいた直後から、ぼくは自分自身の言動に細心の注意を払うようになる。あくまでさりげなくふるまうぼくは、明らかにそれまでのぼくの気持ちや行動から変化している。三ヶ月前まで、ぼくにとって、「元気なおばあちゃん」であった彼女の異なる様子に心を動かされたのではないか。ぼくが胸をつかれたこの日の出来事をきっかけに「終わりのない散歩」を書いたのではないだろうか。

